

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520925

研究課題名(和文) タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究 都市と辺境の動態から

研究課題名(英文) An anthropological study of social movements in Thailand: Focusing on interaction in urban and rural areas

研究代表者

高城 玲 (TAKAGI, RYO)

神奈川大学・経営学部・准教授

研究者番号：60414041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：近年のタイを中心とする地域社会の動態は、特に都市部での政治的な対立を中心に、これまで主に制度論や統計を中心とする政治経済学的な分析から説明されることが多かった。本研究では、地域社会の動態に関する社会運動という視座に着目し、国家レベルのマクロな視点のみならず都市部と農村辺境部双方におけるミクロな相互行為の過程という視点からも調査究明を行った。特に、タイのタクシン元首相を対立軸とする政治的な社会運動やミャンマーからの移民労働者コミュニティ運動に焦点を当て、マクロとミクロ双方の視点を併せ持つ分析の重要性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：As regards social changes around Thailand, especially political conflict in urban areas, it was mainly described by the institutional approach or the analysis of political economy. This research focused on social movements related to social change, not only from the macroscopic approach in a level of nation state but also from the microscopic approach of interactions in urban and rural areas. This research also pointed out the importance of both viewpoints of macroscopic and microscopic approaches to social movements, mainly focusing on political social movements around former prime minister Thaksin Shinawatra, and community movements of Myanmar migrant workers in Thailand.

研究分野：文化人類学

キーワード：社会運動 相互行為 文化人類学 タイ：ミャンマー

1. 研究開始当初の背景

近年のタイを中心とする地域社会は、国家を分断する各派の政治的な運動が武力衝突にまで進展し、大きな変動の波に飲み込まれている。そうした地域社会の動態は、これまで主に制度論や統計を中心とする政治経済学的な分析から説明されることが多かった。こうした鳥瞰図的な分析も必要不可欠であるが、そこで不十分だったのは、実際に変動過程を生きている地域社会の実態や、そこでの人々の具体的な行為のあり方にも着目した分析であり、特に相互行為に足場をおいたミクロな視点からも社会の動態を分析する視座である。

また、近年の文化人類学における研究動向では、日常的実践やミクロ人類学、実践コミュニティ論や実践空間論など、行為という地平から社会分析を立ち上げる視座が注目を集めてきた。

研究代表者はこれまで、相互行為という視座の重要性に関して、主にタイの人類学的研究と理論的研究の先行研究を整理し、残された問題の所在を明らかにしている。そこでは相互行為を選択自由で主観主義的な視点で捉えるのではなく、身体化した慣習的な行為のやりとりとして捉え、その行為の過程の中にマクロな社会秩序や社会変動が生み出されるという視点の重要性、また、そうした行為のやりとりの過程を具体的な時と場所における民族誌として厚く記述していくことの重要性を指摘している。

そこで本研究では、微細な行為に現れる変動の可能性がより大きな社会運動へと展開していく動態の過程に焦点を当てていくこととした。

2. 研究の目的

本研究は、現在変動の中にあるタイを中心とする地域社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰りひろげる相互行為の過程というミクロな視点からも記述し探求することを目的とする。

特に近年のタイでは、都市部を中心に展開される各派の政治的な対立と運動に加えて、農村部を中心とする農民らの運動、国境付近の国境部における反公害運動やミャンマーからの移民らによるコミュニティ運動も活発化している。本研究の特徴は、都市部で注目される大規模な運動のみではなく、農村や国境における運動との連関の中で、しかも相互行為というミクロな地平からもタイを中心とする地域社会の動態を探求しようとする点にある。

3. 研究の方法

本研究では、タイを中心とする地域の都市部・国境部双方における社会動態、特に社会運動に関連する人々の集まりの場所を対象化し、現地調査を各年度にわたって行った。

現地調査では、運動に関連する人々の集まりの場所における微細な相互行為を出来る限りビデオ映像におさめ、整理分析を行った。

研究代表者が主として調査対象とした事例は、タイ中部ナコンサワン県内の農村部における相互行為や地域社会の動態であり、また、タクシン元首相を軸とする近年の政治的対立に関連する社会運動である。

特に後者に関しては、チェンマイ都市部におけるタクシン派反独裁民主同盟(UDD)の運動や、UDDと関係をもつチェンマイ県内国境農村部のコミュニティラジオ局などで継続的な調査を重点的に行った。また、2013年末からは対立する反タクシン派の人民民主改革委員会(PDRC)がタクシン派のインラック首相退陣を求め、バンコクで大規模な反政府運動を展開したが、その首都バンコクでの運動に関しても現地での調査を行い、一部をビデオ映像におさめた。

また、タイでの政治的な対立に関連する運動に関しては、上記の現地調査に加えて、新聞雑誌記事や機関誌、立て看板やプラなどを含めた文字・統計資料、ネット上のSNSを含めた多様なメディアで展開される文字・映像・音声資料も収集し整理した。

研究代表者はまた、国境部の社会運動に関して、カンチャナブリ県のミャンマー国境地帯の元鉱山で展開されている反公害運動に関する現地調査も行った。

他方で研究分担者は、近年急増しているミャンマーからタイへの移民労働者コミュニティの運動に関して、サムットサーコーン県マハーチャイとチェンマイ市内でNGO等の支援団体や宗教施設を中心に、ビルマ語を用いた現地調査を行った。合わせて、タイ周辺地域との関係における多角的な視点を得るために、合法的な移民の送り出しを行う業者へのインタビュー調査を行うとともに、移民を送り出すミャンマー側の社会変動に関しても現地調査を行った。

上記のように、タイを中心とする地域社会の動態、社会運動の現地調査を、都市部のみならず、農村部や国境部、そして国境をまたいで隣接する地域においても行い、全国レベルのマクロなデータのみならず、ビデオを利用しながらミクロな行為のデータをも研究対象としたことが、本研究方法の特徴と言える。

4. 研究成果

(1) 調査研究の主な成果概要

タイ農村社会を分析の対象としながら、相互行為と社会秩序、社会変動との関係に関する分析視座を「秩序のミクロロジー」として提示した(研究代表者)。それは、地域社会の集まりの場において人々が日常的に繰りひろげる相互行為に焦点を当て、そうした相互行為の積み重ねが社会秩序や社会変動を生みだしていくミクロな過程を具体的な

民族誌記述として描き出していくという視座である。そこでは、かつての調査を主としながらタイ農村社会での事例をもとに、微細な行為の中に変動への可能性を示唆する事例を一部で捉えることが出来た一方で、最終的には関係性の再生産を帰結するような行為の過程が多く見受けられた。

従ってここからは、相互行為の積み重ねが社会秩序の再生産に向かう過程よりも、行為過程が社会の変動、特に運動へと向かう場所に重点的に着目していく必要性が明らかにされた。

タイにおけるタクシン元首相を軸とする近年の政治的対立・変動と社会運動に関して、これまでの研究では首都バンコクでの動きを中心に全国レベルでの政治過程や政治経済のマクロな動きに焦点が当てられてきた状況に対し、本研究では、地方農村部という視点を導入し、近年の運動へと連なる歴史的な背景を分析した（研究代表者）。対立する運動において、農村部における地域的な分断が見られることから、中央バンコクの視点のみならず、地方農村部における地域社会の実態や歴史的な文脈など、よりミクロな視点からも運動の歴史的な背景を整理した。

具体的には、1970年代から2014年のクーデター後までを対象に、近年のタクシン派、反タクシン派双方の運動へと至る歴史的変遷に関して、新聞雑誌記事や機関誌などの文字・統計資料、ネット上のSNSなどでも展開される文字・映像・音声資料も利用しながら、地方農村部の具体的な動きと運動させて記述したのである。

そこでは、主に以下の3点が明らかになった。第1に近年の政治的な運動には1970年代の学生運動世代の影響が色濃く見られること、第2に運動の相互行為の過程で、地方農村部住民への訴えかけの際に、情緒的な感情や道徳的な価値を前面に出す象徴化の動きが多く見られたこと、第3に敵対する運動主体双方が共に、一枚岩ではなく多様な背景と目的・意図を持った人々や組織が運動という意味において集まり、首都バンコクのみならず地方農村部地域社会においても新たな繋がりを生み出す存在となっているという点である。

タイにおけるタクシン元首相を軸とする近年の社会運動に関して、チェンマイ県辺境農村部のタクシン派コミュニティラジオ局における相互行為の重点的な調査研究を行うことができた（研究代表者）。

こうしたコミュニティラジオ局は、近年の社会運動において、制度論的なマクロな視点からすると、選挙の際の集票機能を持つ存在として、また、社会運動における自派の支持を獲得するための存在として、バンコクの中央組織にとってのある種のターゲット、客体、手段として位置づけられている。しかしなが

ら、辺境農村部における運動の集まりの場としてコミュニティラジオ局に着目し、そこで繰りひろげられる相互行為に注目すると、必ずしもターゲットや客体という枠組みに止まりきらない新たな可能性も生じていることが明らかになってきた。

そこでは、地方辺境部における独自の歴史文化的背景や、そこで積み重ねられる運動の相互行為を通じて、中央バンコクや都市部が意図する運動組織化の論理や枠組みを超えて、独自の運動の論理や活動を展開していく事例も見受けられたのである。つまり、中央や都市部から一方的に対象化され、組織拡大の手段として枠付けられていく単なる運動組織ではなく、地域社会の生活の論理に根ざした独自の運動のコミュニティとして生成されていく新たな契機が見いだされたと言えるだろう。

こうした新たな生成の可能性は、中央バンコクや都市部のみの視点では捉えることができず、また、マクロな制度論的な視点のみでも捉えることが出来ない契機である。都市部と辺境部双方への視点と、ミクロな行為の過程という視点の両者を組み合わせることによってはじめて明らかになる論点であると考えられる。

近年急増しているミャンマーからタイへの移民労働者コミュニティの運動に関して、サムットサーコーン県マハーチャイとチェンマイ市でNGO等の支援団体や宗教施設を中心に、送り出すミャンマー側を含めたビルマ語での調査研究を行った（研究分担者）。そこでは、同じミャンマーからの移民労働者でありながら、海産物加工工場で単純労働力として働くマハーチャイのモン人移民労働者と、集約的な労働需要が少ないシャン系民族を中心とするチェンマイ市の移民労働者では、歴史的背景とエスニシティ、現状が大きく異なることが確認された。

いずれのケースも陸路で移動しているが、長い移住の歴史を有し、シャン系民族を中心にカレンやパダウン、ビルマなど多様な民族が居住するチェンマイに対し、マハーチャイの場合には移動の歴史が浅く、移民の多くがモン人であるという違いがある。

また、チェンマイ市の場合には、1980年代に移住しタイ語を流暢に操る移民らが中心となって、ミャンマーからビルマ人僧侶を招聘し、ビルマ式の儀礼の実践にこだわるとともに、次世代に対しシャン文化やビルマ式の仏教教育を熱心に行う様子が見られた。その背景には、タイ都市部の生活における宗教とのかかわりの希薄化があり、タイで育つ次世代の子供たちが、特に宗教的側面においてホスト社会に同化しないよう危惧する様子が見られた。さらに、ミャンマー系移民が中心となって活動する地域社会組織（CBO）も結成され、シャン語のパンフレットを作成し、寺院で労働省と共同で、法的に脆弱な立場に

置かれやすい同胞への啓蒙活動や生活支援を行う様子が見られた。

マハーチャイの場合にも、寺院だけでなく、タイでの出稼ぎの成功を祈願し、その成就の見返りとしてビルマ的な精霊の祠と像を建立するケースが見られたが、移民労働者支援についてはタイ人の NGO が行うのみで、自助的な CBO 等は見られなかった。マハーチャイはタイで最も多くのミャンマー移民労働者が集住する場所であるにもかかわらず、CBO 等が見られない理由としては、チェンマイと比較すると移民の歴史が浅く、タイ語で高等教育を受けるような人材が育っていない点が挙げられる。

また、ミャンマー側での調査からは、上記のような国境付近の少数民族とは別に、マジョリティであるビルマ人が多く住む中部平原の農村地域から、タイ中部の縫製工場等に毎週数百名を合法的に送り出すエージェントが複数存在することも明らかになった。

同じミャンマーからの労働者コミュニティ運動として捉えるマクロな視点からは上記のような差異が捨象されてしまいかねない。地域や歴史的な背景などミクロな文脈にも注目することで移民コミュニティ運動の実態が更に明らかにされた。

他方、マハーチャイとチェンマイの両地域に共通する点として、移民労働者同士が活動を展開する集まりの場所として、NGO 以外に僧院やモスク、教会といった宗教施設が重要であり、NGO や CBO 等の活動も、移民の多くが集まるこれら施設において実施されることが多いことが分かった。これは、送り出すミャンマー側で慣習化された宗教的実践が、移出先のタイでのコミュニティや運動の繋がりを形成する上で非常に重要な役割を果たしていることを示している。

近年ではマレーシアなどでロヒンギャー問題に関連し、ビルマ人仏教徒に対する報復殺人も発生している。ここから、ミャンマー側における社会変動や宗教的実践の新たな展開などが、タイへの移民コミュニティにおける実践にどのような影響をもたらすのかという新たな問いも浮上してくることとなった。

こうして、移民を送り出す側の背景として、ミャンマーにおける政治変化や宗教・民族対立などのマクロな状況が関係していることも指摘されるが、他方で、移出先のタイでのコミュニティでは、ミクロな生活世界における宗教的実践などの行為を通じて、新たな関係性や差異が再配置されていく運動過程の一端が明らかにされた。

(2) 今後の展望

上記のように本研究では、タイを中心とする地域社会の動態に関して、特に相互行為という視座に着目し、都市部のみならず農村・辺境部と周辺諸地域を含めた多角的な事例から調査研究を行った。いわば、第1に視座

として制度論を主とするマクロな視点に相互行為というミクロな分析視座を接合する試みであり、第2に首都や都市部を中心とする分析に辺境農村部の事例分析を接合する試みでもあり、第3に文字・統計資料にネット上のものや収録したビデオなどの映像・音声資料を接合するという試みでもあったと言える。

今後は、この3つの接合の試みをさらに進め、タイの政治的な運動を主たる対象として、運動の場におけるミクロな行為過程の記述分析を深化させ、変動へと向かう微細な契機を捉え、それがマクロな社会変動へと向かう動態を具体的な過程として厚く記述し究明を進めることが求められると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

高城玲、「タイの政治・社会運動と地方農村部 1970年代から2014年までの概観」、『神奈川大学アジア・レビュー』Vol.2、2015、4-39。

飯國有佳子、「タイにおけるミャンマー人移民労働者コミュニティ マハーチャイとチェンマイでの予備的調査から」、『大東アジア学論集』第13号、2013、98-110。

飯國有佳子、「職業的霊媒という選択 ビルマ霊媒カルトにおける女性の関与の多様性」、『大東文化大学紀要<社会科学>』No.51、2013、1-19。

飯國有佳子、「功德の環流が生み出すもの パゴダ建立における超自然的存在と社会的紐帯」、『CIAS Discussion Paper No.46 積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究』(長谷川清・林行夫編) 京都大学地域研究統合情報センター、2015、43-50。

[学会発表](計2件)

Takagi Ryo, "Community and State Governance: Interaction of the King's Birthday Ritual and Village Scout Training in Central Thai Village", 12th International Conference on Thai Studies, 22 Apr. 2014, The University of Sydney.

飯國有佳子、「『出家』を問い直す ミャンマー女性の宗教実践の事例から」、『日本宗教学会、2013年9月7日、國學院大學。

[図書](計4件)

高城玲 他、『植民地近代性の国際比較 アジア・アフリカ・ラテンアメリカの国際比較』(永野善子編著) 御茶の水書房、2013、308(157-193)。

高城玲、『秩序のミクロロジー タイ農村における相互行為の民族誌』、神奈川大学出版会、2014、354。

高城玲、飯國有佳子 他、『世界民族百科

事典』(国立民族学博物館編) 丸善出版、
2014、789(554-555、550-551)。
飯國有佳子 他、『アジアの仏教と神々』
(立川武蔵編) 法蔵館、2012、325(105-107)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高城 玲 (TAKAGI RYO)
神奈川大学・経営学部・准教授
研究者番号：60414041

(2) 研究分担者

飯國 有佳子 (IIKUNI YUKAKO)
大東文化大学・国際関係学部・講師
研究者番号：90462209